市場から世界をみれば

ISC 情報システム株式会社　大谷淳一

第26回「水が足りない！」④

67年の「6日戦争」（第三次中東戦争）は、ヨルダンがとった政策に対するイスラエル側の回答であった。ヨルダンは「ヨルダン川は自国のみの利用に変更する」と声明を出したが、これに対しイスラエルは反発、戦争になった。6月5日から10日の6日間で勝敗は決した。イスラエルの勝利である。イスラエルは占領した土地のおかげで水源が確保でき、ヨルダン川西岸地区の帯水層を管理することで、イスラエルの水資源を50％も増大させた。

かなか進まない。93年のパレスチナ暫定自治原則宣言（オスロ合意）によって両国共通の水開発計画ができたが、イスラエル側が「乏しい水資源は平等に分割されるべき」という考えを拒否しているため、行き詰まってしまった。

95年のオスロ合意IIの下、イスラエルはヨルダン川西岸地区への水供給の全面的管理を行っているが、イスラエルはヨルダン川上流の水の75％を取水している。そのため、ヨルダン川西岸地区に流れこむのは、塩分濃度が高いほんのわずかな水となっている。地下帯水層の管理もイスラエル政府が行っているが、それにはヨルダン川西岸地区にとって唯一の水源である山岳地帯帯水層へのアクセスも含まれている。

この地では、水の問題はイスラエル人とパレスチナ人との交渉の最大の課題でもある。ヨルダン川西岸地区では、1日35リットルの水で生活しているパレスチナ人がいる一方で、近くに住むイスラエル人入植者は芝生に水をやり、プールで水泳を楽しんでいるという状況になっている。

パレスチナ・イスラエル両国の和平交渉は、なお、ヨルダン川沿岸の帯水層は、地下水が過剰に利用されたため、下水や輸送されてきた水で涵養（帯水層に水が供給されること）されている。ガザ地区では帯水層を利用しすぎたため、深刻な水の塩水化を招いている。パレスチナの水資源は危機的な状況にあるのだ。

中央アジアの緊張は、シルダリヤ川とアムダリヤ川の地表水の水源で起きている。この紛争の発端は、カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンの下流域3カ国が灌漑用にもっと水がほしいと要求したことだった。

下流に位置するカザフスタンとウズベキスタンは、夏期の水をもらうことを交換条件として、上流のキルギスとタジキスタン両国に石炭を供給している。しかし、この石炭の供給が不安定なため、キルギスとタジキスタンでは、冬季には水力発電所を利用して発電している。この水がダムの放水を招き、これが原因で、下流3カ国に洪水をもたらしている。このうちのウズベキスタンは、約束を反故にされたことに反発し、軍事演習でキルギスの貯水池を占領する作戦のリハーサルを行っている。

89年、政治問題に絡めて、トルコはシリアへの給水を断つと脅した。

92年、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争において、ボスニア系セルビア人側が、サラエボへの水供給を断った。

98年、コンゴ民主共和国の反乱軍が、インガダムを攻撃した。

99年、ザンビアのテロリストの爆撃のため、ルサカへの水供給が断たれた。

00年、オーストラリアのクイーンズランド州で、コンピュータと通信網を駆使して下水道を自由に操り、河川や公園に下水を放流しようとした男を逮捕した。

02年、ネパールで、毛沢東派の武装勢力が水力発電プロジェクトを破壊し、西部の水供給に損害を与えた（水の世界地図『戦争の武器』より引用）。

このように、紛争は世界のどの地域でも発生しうるし、水は、時には武器に、時には重要な交渉道具となるのである。あらゆる国々が水を確保するために、あらゆる努力をしているのである。それほど水は重要なものなのだ。

【略歴】1957年北海道美唄市生まれ。85年、食品管理、生鮮管理のシステムを開発する情報システムを創業。荷受卸売業者や食品製造会社、仲卸売業者向けのコンサルティング、セミナー、業務改革、講演を各地で行っている。主な執筆として「青果卸の業務改善」「青果卸の業務改善2」「食糧操作」などがある。